

インドヨーロッパ語族におけるパーフェクト (=完了形) とゲルマン語派における過去現在動詞について

斎藤 治之

従来ゲルマン語の《過去現在動詞（いわゆる話法の助動詞）》は「形態的には本来過去形（正確には完了形）であった形式を現在形として用いる強変化動詞（ドイツ言語学辞典749頁）」と定義されることが一般的であった。しかし、この定義はあたかもすべての過去現在動詞がインドヨーロッパ祖語の完了形に遡るかのような印象を与える恐れがある。事実後述するようにすべての過去現在動詞が祖語の完了形に遡る訳ではなく、そのうちの幾つかは類推によって生じたり、あるものは完了形と密接な関係を持つ *Stativ* に起源を持っていることがわかっている。

本論文は、現在語幹からもアオリスト語幹からも独立している完了語幹に基づくインドヨーロッパ語の完了形とゲルマン語派の過去現在動詞の関連性を探ることにより、過去現在動詞のうちどれが祖語の完了形に遡るものであるか、またどれが完了形とは無関係に成立したものであるかを明らかにし、さらに過去現在動詞に関する厳密な定義を与えることをその目的とするものである。

完了形を造るための基礎となるのは完了語幹であるが、現在のインドヨーロッパ語比較言語学の語根・語幹理論の主流を成す考え方についてまず簡単に触れてみたい。これは主に動詞の語根が本来持つ *Aktionsart* と語幹形成との関係に着目した理論であり、この考え方には次のように要約することができる：「動詞の語根はその *Aktionsart* に従って *durativ* と *punktuell* に大きく区分され、前者は接尾辞を伴わずに語根現在、後者は同様に語根アオリストをつくる。」

以下例を挙げてみると、まず、上に述べた動詞の語根が持つ *Aktionsart* に従って 1. *durativ* 語根は接尾辞を伴わずに語根現在

を、2. punktuell 語根は語根アオリストを形成する例として 1. **uejH-* “auf etwas losgehen” (ved. *véti*, aav. *viieinti*, lit. *vejū*, gr. (F) *ἵε μα τ*); **dih₁-* “eilen” (gr. *δι ε μα τ*, ved. *dīyati* “fliegen”; **sperg̥h-* “eifern, eilen” (aav. *spərəza-*, gr. *σπέρω - χθο μα τ*); **b^heh₂-* “sichtbar sein” (ved. *vi-bhāti*, jav. *fra-uuāiti*) および 2. **peh₃-* “einen Schluck trinken” (ved. *a-pāt*, vgl. redupl. Präs., **pí-ph₃-e-ti* (> ved. *píbati*, lat. *bibit*, air. *ibid*), **telh₂-* “(auf) heben” (gr. *τλην α τ*, vgl. Nasalpräs. **tl-nh₂-* (> lat. *tollō*, air. *tlenaim*) をあげることができる¹。またこれらの例から 1 に属する語根では接尾辞 *-s-* によってアオリスト形が、2 に属する語根では重複あるいは接中辞 *-n-* によって現在形が形成されることがわかる。

上述の原則は現在語幹およびアオリスト語幹にはあてはまるが、完了語幹ではどうであろうか。インドヨーロッパ祖語における完了語幹成立については従来諸説が存在しており、以下 1. 人称語尾、2. 語幹母音、3. 語頭音重複 についてその経緯について簡単にまとめてみたい。

1. 人称語尾： インドヨーロッパ祖語における完了語幹の成立および中動態 (Medium) への移行とその成立について総合的な見解を初めて提示したのは C.Watkins²である。彼は祖語の最古の段階に想定される例えば **ghwene/o-* (語根 **gwhen* “schlagen”) という語幹が I (thematisch), II (athematisch) に分割した後さらに II から IIa のような o-Stufe による語幹 (= 完了語幹) が成立し (Watkins は完了形がその成立の段階においてすでに単数 o-Stufe, 複数 Schwundstufe という語幹母音を有していたと考えている)、さらに IIa から IIb というそれぞれ Schwundstufe (= oxyton: -ó/é) と e-Stufe (= baryton: -o/e) の一般化された athematisch な中動態語幹が成立したという図式を想定している。彼は I (thematisch) の語幹からヒッタイト語 (ヒッタイト語においては *hi*-Konjugation: Präs. Sg. 1-*ahhi*- < *-*ohzoj*-, 2. -*atti*- < *-*othzoj*-, 3. -*ai*- < *-*oj*-) を除く他のインドヨーロッパ諸語の

thematisch な能動態現在語幹 (Sg. 1. *seg^ho-h₂o > gr. ἔχω “habe”, 2. *seg^hei > gr. ἔχεις, 3. *seg^he > gr. ἔχει)、 II b の語幹からヒッタイト語を除く他の諸語の athematisch (*kei-toj > ai.séte “liegt”, heth.kitta “liegt”; *d^hug^h-toj > ai.dugdhé “gibt Milch”) これからさらに thematisch (gr. εὕχομαι “rühme mich”, vgl. *éug^{wh}-ntoj (=athemat.) > ai.óhate “rühmen” な中動態現在語幹が成立したと考えている。また、 II a の完了語幹から II b の中動態語幹への移行に完了形に特有な 3 人称単数語尾*-o から中動態の 3 人称単数語尾*-to (vgl. *kei-toj > ai.saye, heth. kiya; *kei-toj > ai.sete, heth.kitta; *d^hug^h-toj > ai.duhé; d^hug^h-toj > ai.dugdhé) への移行の契機を仮定している：

<i>gh^{wene}/o</i>	I	<i>gh^{wene}/o-əo</i>
		<i>gh^{wene}/o-təo</i>
		<i>gh^{wene}/o</i>
	II	<i>gh^{wen}-əo</i>
		<i>gh^{wen}-təo</i>
		<i>gh^{wen}-e/o</i>

(II a)	<i>gh^{wón}-əo</i>	<i>gh^{wṇ}-mē</i>
	<i>gh^{wón}-təo</i>	<i>gh^{wṇ}-(t)é</i>
	<i>gh^{wón}-e</i>	<i>gh^{wṇ}-r(ó).</i>

(II b)	<i>dugh-əo</i>	<i>dugh-mé</i>	<i>kei-əo</i>	<i>kei-me</i>
	<i>dugh-təo</i>	<i>dugh-té</i>	<i>kei-təo</i>	<i>kei-te</i>
	<i>dugh-ó</i>	<i>dugh-ró</i>	<i>kei-ó</i>	<i>kei-ro.</i>

(Calvert Watkins, Indogermanische Grammatik, 1969, 112–113.)

Watkinsの以上のような、意味に関する考察を欠いた、語形のみによる説明に対して、H.Eichner³は人称語尾 *-o と *-to による語形の間に見られる意味の差異を指摘している。彼は語根 *stey “rühmen” を例に取り、*stéy-to は transitiv-reflexivisch として “jd. sagt von sich etwas, röhmt sich” を *stéy-o は intransitiv-passivisch” として “wird unter Hervorhebung genannt, wird bekannt” を意味するとしている。

このような指摘を受けて H.Rix⁴はインドヨーロッパ祖語には能動・中動と並んで *stéy-o がそうである第 3 のカテゴリーとしての Stativ (e-Stufe あるいは Schwundstufe) による語幹 + 完了人称語尾; 尚 o-Stufe による “語幹母音” および “語頭音重複” については下記参照)、が存在したという説を展開している。彼はまた Watkins と同様に中動態を一次的 (primär) ではなく二次的 (sekundär) に成立したカテゴリーであると考えているが、Watkins とは異なり、Stativ から Medium への移行の過程はインドヨーロッパ諸語の分化以前に終了したと考えている。このようにして彼はインドヨーロッパ祖語に Aktiv 以外の次の 2 種類 (I -to, II -o) の人称語尾を想定している：

	I		II
3. Sg. Ipf.	ai. -ta	ávasta	-a-t áśayat
Ind. Prs. ai.	-te	váste	-e śáye stáve
heth.	-ta (-ri)	westa	-a (-ri) istuari
3. Pl. Ipf. ai.	-ata	ávasata	-ra-n áśeran
Ind. Prs. ai.	-ate	vásate	-re sére

(Helmut Rix, Keltisches und indo-iranisch-griechisches Verbalsystems, 1977, 135.)

E.Neu⁵も上述の研究者達とほぼ同様な見解であるが、彼は完了形を statisches Präsens として dynamisches Präsens である能動態に対峙させ、後にそれぞれに現在：非現在の対立が生じたとしている：

Stadium I

	ACTIVUM (Handlungsform)	INIUNCTIVUS	PERFECTUM (Zustandsform)
Sg. 1.	$*-m$		$*-Ho (*-h_2O)$
2.	$*-s$		$*-t^hO (*-th_2O)$
3.	$*-t$		$*-o$
Pl. 3.	$*-nt$		$*-or$

Stadium II

	ACTIVUM (Handlungsform)	PERFECTUM (Zustandsform)	
	Präsens	Nicht-Präsens	Präsens
Sg. 1.	$*-m-i$	$*-m$	$*-Ha (*-h_2a)$
2.	$*-s-i$	$*-s$	$*-t^h a (*-th_2a)$
3.	$*-t-i$	$*-t$	$*-e$
Pl. 3.	$*-nt-i$	$*-nt$	$*-Vr$
			Nicht-Präsens
			$*-Ho (*-h_2O)$
			$*-t^hO (*-th_2O)$
			$*-o$
			$*-or$

(Erich Neu, Das frühindogermanische Diathesensystem. 1985, 283, 285.)

このようにして、彼は現在形と完了形の対立こそがインドヨーロッパ祖語においては一次的である。従って、中動態の主要な意味である“動詞の表す動作の主語に及ぼす影響”は完了形から受け継いだものであり、ヒッタイト語の中動態人称語尾の成立過程にその関係が見て取れるとしている：

Hethitische <i>hi</i> -Konjugation	
Präsens	Präteritum
Sg. 1. $-he, -hi < *-h_2a-i$	$-hun < *-h_2O + -u-m$
2. $-ti < *-th_2a-i$	$-ta < *-th_2O$
3. $-i < *-e-i$	$-(s)ta < *-t-o$
Pl. 1. $-ueni$ (Endung der <i>mi</i> -Konj.)	$-uen$ (Endung der <i>mi</i> -Konj.)
2. $-teni$ (Endung der <i>mi</i> -Konj.)	$-ten$ (Endung der <i>mi</i> -Konj.)
3. $-(a)nzi$ (Endung der <i>mi</i> -Konj.)	$-ir (-er)$

(Erich Neu, Das frühindogermanische Diathesensystem. 1985, 289.)

M.Kümmel⁶は従来暗黙のうちに同一視されていた *Stativ* と *Perfekt* の人称語尾の差異を初めから以下のように想定し、さらに *Perfekt* は、“先行する動作の完了の結果としての主語の状態”という“主語の状態”(=*Stativ*の語尾によって表される)と“完結した動作・過程(=語頭音重複によって表される)”という二つの意味の複合から成り立っていることから、*Perfekt* が重複音節を有する *Stativ* である。また、祖語において *Stativ* という独立したカテゴリーが失われた後、重複音節をともなった *Stativ* 形(=完了形)が *Aktiv* に、残りの *Stativ* 形は *Medium* に組み入れられた、という説を提唱している：

<i>Stativ:</i>	<i>PE</i>	<i>SE</i>	<i>Perfekt: PE</i>	<i>SE</i>
Sg.	1. *-h ₂ ai̯	*-h ₂ a	*-h ₂ ai̯	*-h ₂ a
	2. *-th ₂ ai̯	*-th ₂ a	*-th ₂ ai̯	*-th ₂ a
	3. *-e/oi̯	*-e/o	*-ei̯	*-e
Pl.	3. *-re/oi̯	*-re/o	*-rs	*-r̄

(Martin Kümmel, *Stativ und Passivaorist im Indoiranischen*, 1996, 8.)

2. 幹母音：インドヨーロッパ諸語の完了形に見られる o-Stufe を fakultativ とする説と obligatorisch とする説の二つの相対する考えが存在するが、これは語頭音重複を fakultativ と捉えるか obligatorisch と捉えるかということと密接に関連している。前者の代表として W.Meid をあげることができる。彼は“完了形はその最も初期の段階においては能動態に対して特別の人称語尾によって区別されており、o-Stufe も語頭音重複も二次的な手段にすぎない。”と述べている。彼はその具体例として o-Stufe (あるいはe-Stufe) による完了形と、彼によれば完了形の本来の語幹母音を示す、e-Stufe による分詞形をあげている⁷： gr. o i̯ ð α - εi̯ ð ώς, got. wait - *weitwōbs*, gr. ε̄ ρ χ α τ α i̯ - ε̄ εργω

E.Neu⁸ も W.Meid と同様に完了形における o-Stufe による語幹母音および語頭音重複を redundant と捉え、特に語頭音重複は名詞にも見られることから動詞の文法カテゴリーである時制とは本来一次的な関係を持っていなかったと述べている。

完了形における o-Stufe と語頭音重複を fakultativ とする説に対しこれらの手段を obligatorisch とする立場も存在する。C.Watkins⁹ は、上述したように、完了形がその成立の段階ですでに単数 o-Stufe・複数Schwundstufe という語幹母音を示していたとしている：

3. 語頭音重複：インドヨーロッパ諸語の動詞においては以下の 3 つの時制において語頭音重複が現れ、これが完了形に制限されたものでないことがわかる：

- ① 現在形：ai. *dádāti* “gibt” , δ i δ ω μ t “gebe” (< *dē-doh₃-); lat. *lūdō* “spiele” (< *lé-loud-); got. laikan “springen” (< *lé-laik-);
ai. *bibhárti* (< *bhi-bhé-r-) “trägt”; gr. ἔστη “stelle” (< *sti-stéh₂-)
- ② アオリリスト形：ai. *ávocat* “sagte”, gr. ε ἔ π ο ν “sagte” (< *e-ue-uk^u-e-)
- ③ 完了形：ai. *dadárśa* “hat erblickt”, gr. δ ἔ δ ο ρ κ ε “hat erblickt” (< *de-dórke-); gr. μ ἔ μ ο ν α “habe im Sinn”, lat. *meminī* “erinnere mich” (< *me-món-)

以上のように完了形の語頭音重複は現在形の 2 種類の重複音節のうちの母音 e によるそれとはアクセントの位置のみによって区別されていることがわかる。

さらに、現在形における語頭音重複が punktuell な Aktionsart を有する語根の現在形を作るための手段として用いられており、このことからも重複音節が語根の表す意味に“強意・反復”等の意味を

付加する手段として使用されていることが明らかである。完了形における語頭音重複を *fakultativ* と見なす W.Meid は完了形における重複音節が“強調・反復される動作の象徴的表現手段¹⁰”として用いられているとしている。同様に E.Neu も $\beta \acute{\epsilon} \beta \rho \nu \chi \epsilon$ “er brüllt unaufhörlich” $\gamma \acute{\epsilon} \gamma \eta \theta \epsilon$ “er ist voller Freude” 等の“強意完了形¹¹”の存在を指摘している。

一方、完了形における語頭音重複を *obligatorisch* と見なす M.Kümmel は、すでに述べたように、重複音節が“動作の完結¹²”を表すために用いられていると考えている。

以上述べたことをまとめれば、o-Stufe および語頭音重複を *fakultativ* あるいは *obligatorisch* と見なす研究者達も、完了形が能動態とは異なる人称語尾によって特徴づけられており、さらに、この人称語尾が中動態の人称語尾へと発展した、という点において一致している。そこで、彼らは完了形が本来“完結した動作そしてそこから生じる結果 (=Resultativperfekt)”を表すために用いられた形式ではなく、中動態である完了形が生理的・心理的状態を表す自動詞から作られた自動詞の意味を有する“先行する完結した動作を伴うにせよそうでないにせよ主語の状態”を表す形式であると考えている。さらに、他動詞による Resultativperfekt は自動詞による完了形より後に成立したものであり、この用法はアオリリストおよび未完了過去と意味的に重なるという理由から多くのインドヨーロッパ諸語においては完了形はこれらの時制とともに過去時制 (Präteritum) に集約されたとしている。

しかし、インドヨーロッパ諸語の古い段階においては自動詞と他動詞の区別は後の時代のようには必ずしも厳密ではなく、完了形の起源が自動詞から作られた自動詞の意味を有する形式であるという考えは実証が不可能な事柄であるとも考えられる。

すでに述べたように動詞はその表す *Aktionsart* に従って *durativ* および *punktuell* に区分され、語根現在形・語根アオリリスト形の形成に大きく関与していることがわかっている。それでは完了形においては動詞の *Aktionsart* がどのように反映されているのであろう

か。ここでは、過去現在動詞 (=Präteritopräsens) を例にとり見てみたい。完了形の本来の意味が自動詞的であるにせよ Resultativperfekt であるにせよ、過去現在動詞は語根の Aktionsart が durativ か punktuell に従って次の 2 つのグループに分類される：

1. durativ: got. *daug* “taugt” (語根 *d^heug^h “nutzbar machen, (Ertrag) produzieren”; Germ. *daug-/dug- は Stat. Präs. *d^hug^h- (é)j に基づく他の過去現在動詞に倣った類推形); got. *mag* “kann” < *mág^h- (= 現在語幹) (語根 *mag^h “können, imstande sein”; 複数形語幹 Germ. *mug- は類推形); got. *ga-mōt* “habe Raum, habe Gelegenheit” < *me-mōd- (現在語幹に基づく二次的完了形) (語根 *med “messen”; 現在語幹 *mēd-/*med-)
2. punktuell: got. *wait* “weiß” < *uójd- (完了形) (語根 *ueid “erblicken”); got. *ga-man* “erinnert sich” < *me-món- (完了形) (語根 *men “einen Gedanken fassen”; got. *ga-dars* “wagt” < *d^he-d^hórs- (完了形) (語根 *d^hers “Mut fassen”); got. *kunnan* “kennen” < *g̥n-n-h₃- (鼻音現在形) (語根 *gneh₃ “erkennen”; 単数形語幹 *kann- は他の過去現在動詞に倣った類推形); got. *parp* “bedarf” < *te-tórp- (完了形) (語根 *terp “sich sättigen”; “ist befriedigt” から “bedarf”への意味変化の過程は不明), got. *ga-nah* “genügt” < *h₂e-hnók- (完了形) (語根 *h₂ne_k “erreichen”; “hat erreicht, reicht aus” から “genügt”への意味変化); got. *skal* “ist schuldig, muß, soll” < *ske-skól- (語根 *skel “schuldig werden”); got. *aih* “besitzt” < *He-Hóik- (完了形) (語根 *Hej_k “sich aneignen”); got. *ōg* “fürchte” < *h₂e-hzóg^h- (完了形) (語根 *h₂eg^h “in Furcht geraten”)

このように、2 の punktuell な語根においては、got. *kunnan* (dt. können) を除いてすべての過去現在形がインドヨーロッパ祖語の完了形に遡る。これらの過去現在形は意味的観点においても “完結

した動作とそこから生じる結果”という完了形の基本的意味構造を示しており、その“生じた結果”という部分がゲルマン語においては現在形へと至る契機となったことが窺える。問題は 1 の durativ な語根による過去現在形である。W.Meid ゲルマン語におけるすべての過去現在動詞がインドヨーロッパ祖語の完了形に遡るという考え方から、durativ な語根による完了形は語根の未完了的な意味をさらに強めるにすぎず、この場合重複音節は、上述したように、“強意の象徴的表現手段”として用いられていると述べている。従って、彼によればこのタイプの完了形は“中動態現在形の強調形”であると定義される。彼は同様の完了形としてそのドイツ語訳とともに ai. *jujōsa* “ich genieße intensiv”, ai. *bibhāya* “bin in Furcht” のような例をあげている¹³。しかし、この説明の問題点は、1 に属する過去現在形が、W.Meid の主張とは異なり、起源的に完了形以外の形式に基づいているということである。got. *daug* “taugt” を例に取れば、他のインドヨーロッパ語にこの語根による ai. *duhé* “gibt Milch (> taugt)” (< *d^hug^h-é(j)) という Stativ 現在形 (= 現在語幹+完了人称語尾) が例証されており、この現在形の存在から ved. *dudóha* “hat gemolken”, gr. τέτυκται “ist bereitet” という完了形は Neubildung と見なされなければならない。そこでゲルマン語においても本来起源的に Stativ 現在形 3 人称である *d^hug^h-é(j) が *dug-* へと変化し、この語幹が -u- という過去複数形の幹母音を有するために複数語幹として再解釈され、単数語幹 *daug-* が複数語幹に対して類推によって造られたと推定することが可能である。次に got. *mag* “kann” については、従来この語形の基となる語根として *meg^h (got. *mag* < *mog^h-) という形が考えられてきたが、M.Kümmel は、この形が ved. (ā) *mahe* “verschafft” という Stativ 現在形と起源的に同一で共に祖語の *mág^h-e に遡る¹⁴、という説を提唱している。got. *ga-mōt* “habe Raum, Gelegenheit” については、この語根による現在形 gr. μήδομα “erwäge, ersinne” (< *mēd-o-) からも見て取れるように、祖語における現在語幹が能動・中動両方の態において *mēd/med という具合に第一音節にアクセントを持つ akrodynamicisch な変化を示していた可能性があり、got. *ga-mōt* における語幹の長母音について

は様々な解釈が可能であるとはいえるが、これが現在語幹の長母音の類推によって生じたとする解釈の妥当性を示唆している。

W.Meid が durativ な語根による完了形としてあげている ai. *jujōsa*, *bibhāya* もそれぞれ ai. *jusāná* “Gefallen findend an” (語根アオリスト分詞), *mā bhema* “laß uns nicht in Furcht geraten!” (語根アオリスト希求法) という形が存在しており、これらの語根が Aktionsart に関して durativ ではなく punktuell であることがわかる。

以上のことから重複音節が強意の象徴的表現手段であるとする W.Meid の説は根拠がないものであると考えられる。

すでに述べたように M.Kümmel は祖語において Stativ という独立したカテゴリーが失われた後、語頭音重複をともなう Stativ 形 (= 完了形) は Aktiv に、残りの Stativ 形は Medium に組み入れられたという説を展開している。この説に従えばゲルマン語の過去現在動詞は、従来考えられていたように、すべてが祖語の完了形に遡るのではなく一部は直接 Stativ に由来するものであることがわかる。因みに、ゲルマン語に現れるもの以外の代表的な Stativ 語根として、**h1eh1is* “sitzen” (ved. *āste* “sitzt”, gr. *ἵσταται* “sitzt”; 現在形以外は Neubildung); **kei* “liegen” (ved. *sáye* “liegt”, gr. *κείται* “liegt”; ved. *sásáyāná* “gelegen habend” (完了分詞 = Neubildung)); **ues* “bekleidet sein” (ved. *váste* “hat an”, gr. *ἔχει* “habe an” (*ἔχειν* の完了形として再解釈); ved. *vāvase* “hat sich gekleidet” (完了形 = Neubildung)); **steu* “bekannt sein, preisen” (ved. *stáve* “wird gepriesen”, gr. *στένεται* “gibt kund, röhmt sich”; ved. *tustāva* “hat gepriesen”; (完了形 = Neubildung)) があげられるが、これらの語根による完了形のほぼすべてが Neubildung であることがわかる。ただ、近年刊行された語根辞典 LIV (Lexikon der indogermanischen Verben) においては **kleu* “ hören ”¹⁵ による Stativ 現在形 aav. *sruiiē* “ist berühmt” と 完了形 ved. *súsrāva* “hat gehört” が一次的な形とされており、その分類基準が必ずしも明らかではない。

ゲルマン語の動詞組織の特徴は、それが語根が本来表す Aktionsart とは無関係に、語根が有する音韻構造に従って、語根を

I類からVII類までの母音交替のパターンに組み込みそれに基づいて
 1. 不定詞、2. 過去単数形、3. 過去複数形、4. 過去分詞形を
 形成する、という点にある（例：I類 1. *CeiC-* (> *CiC-*)；2.
CoiC- (> *CeiC-*)；3. *CiC-*；4. *CiC-* (ahd. *grīfan* (nhd. *greifen*):
greif: *griffum*: *gigriffan*; II類 1. *CeuC-* (> *CioC-*)；2. *CouC-*:
 3. *CuC-*；4. *CuC-* (ahd. *biogan* (nhd. *biegen*): *boug*: *bugum*:
gibogan); III類 *CeRC-* : *CoRC-* (> *CaRC-*) : *CuRC-* : *CuRC-* (ahd.
helfan (nhd. *helfen*): *half* : *hulfum* : *giholfan*); IV類 *CeR-* : *CoR-*
 (> *CaR-*) : *CēR-* : *CāR-* (ahd. *neman* (nhd. *nehmen*): *nam* :
nāmum : *ginoman*); V類 *CeC-* : *CoC-* (> *CaC-*) : *CēC-* (> *CāC-*) :
CeC- (ahd. *geban* (nhd. *geben*): *gab* : *gābum* : *gigeban*); VI類
CoR- (*CaR-*) : *CōR-* (> *CuoR-*) : *CōR-* (> *CuoR-*) : *CoR-* (> *CaR-*)
 (ahd. *faran* (nhd. *fahren*): *fuor* : *fuorum* : *gifaran*); VII類 *CoiC-*
 (> *CeiC-*) : *CēC-* (> *CiaC-*) : *CēC-* (> *CiaC-*) : *CoiC-* (> *CeiC-*)
 (ahd. *heizan* (nhd. *heißen*): *hiaz* : *hiazum* : *giheizan*)。そこで、
 例えば *CeuC-* 及び *CeC-* のような音韻構造を示す *ǵeys “kosten”,
 *gʷem “gehen, kommen” というアオリリスト語根（語根アオリスト
 を形成する punktuell な語根）がゲルマン語では got. *kiusa* <
 urgerm. *keus-a-, got. *qima* < urgem. *kʷem-a- のようにそれ
 れII類、V類に属する themat. Präsens (テーマ母音による現在形)
 を形成するというインドヨーロッパ語の時制形形成の基本原則から
 逸脱した現象を示している（例 ved. *gacchati* (< *gʷm-ske/o-),
 gr. β α i ν ω (< *gʷm-je/o-))。

同様のこととは過去現在動詞にもあてはまる。すでに述べたように、
 例えば語根 *dʰeugʰ による Stativ 現在形 *dʰugʰ-é(i) がゲルマン
 祖語で *dug- (第II類過去複数形 *CuC-* と同じ音韻構造) になり、
 この形が現在の意味を有する過去複数形と解釈され第II類に属する
 過去現在動詞に、また、起源的には Stativ にも Perfektにも無関係
 である鼻音現在形 *ǵn-n-h₃- がゲルマン祖語で *kunn- という形
 (第III類過去複数形 *CuRC-* と同じ音韻構造) になり、過去複数形と
 解釈され第III類に組み込まれるに至っている。

以上述べたように、durativ な語根による過去現在動詞の多くは

インドヨーロッパ祖語の完了形には遡らないことが明らかであり、ゲルマン語の過去現在動詞の「本来完了形である形式を現在形として用いる強変化動詞」という定義は部分的に修正が必要であると思われる。

- ¹ García Ramón, Indogermanische Wurzelpräsentia und innere Rekonstruktion. In: Früh-, Mittel-, Spätindogermanisch (Akten der IX. Fachtagung der Idg. Gesellschaft in Zürich, 1994) 53-75, 54f.
- ² Calvert Watkins, Indogermanische Grammatik, Band III: Formenlehre, Heidelberg, 1969, 112-113.
- ³ Heiner Eichner, Die Vorgeschichte des hethitischen Verbalsystems. In: Flexion und Wortbildung, 1975, 99.
- ⁴ Helmut Rix, Das keltische Verbalsystem auf dem Hintergrund des indo-iranisch-griechischen Rekonstruktionsmodells (Kolloquium der Idg. Gesellschaft (Bonn 1976)) 132-158, 135.
- ⁵ Erich Neu, Das frühindogermanische Diathesensystem. In: Funktion und Geschichte (Akten der VII. Fachtagung der Idg. Gesellschaft (Berlin 1985)) 275-295, 283f.
- ⁶ Martin Kümmel, Stativ und Passivaorist im Indoiranischen, Göttingen, 1996, 8.
- ⁷ Wolfgang Meid, Das germanische Praeteritum, Innsbruck, 1971, 53.
- ⁸ Erich Neu, Das frühindogermanische Diathesensystem. In: Funktion und Geschichte 1985, 275-295, 280.
- ⁹ Calvert Watkins, Indogermanische Grammatik, Band III, 1969, 112.
- ¹⁰ Wolfgang Meid, Das germanische Praeteritum, 1971, 21.
- ¹¹ Erich Neu, Das frühindogermanische Diathesensystem. In: Funktion und Geschichte, 1985, 275-295, 280.
- ¹² Martin Kümmel, Stativ und Passivaorist im Indoiranischen, 1996, 9.

¹³ Wolfgang Meid, Das germanische Praeteritum, 1971, 34.

¹⁴ Martin Kümmel, Stativ und Passivaorist im Indoiranischen, 1996, 8.

¹⁵ Lexikon der indogermanischen Verben, Wiesbaden, 1998, 297.